

令和6年度 表彰者紹介・授賞理由

木村賞

松本 修二（姫路市立手柄山温室植物園）

手柄山温室植物園職員として、従来見落とされがちな身近にある、いわゆる「雑草」を中心に貴重な野生植物の栽培管理に尽力し、数々の絶滅危惧種の保存に貢献した。絶滅の恐れがある国内希少野生動植物種「ナギヒロハテンナンショウ」の開花に令和4年に成功した。手柄山温室植物園で毎年開催されている「播磨の絶滅危惧種展」では、手塩にかけて育てた希少植物を数多く展示し、多くの来園者に身近な植物が絶滅の危機にさらされていることを警鐘し、環境への配慮をアピールした。また昨年開催した「牧野富太郎ゆかりの植物展」においても100種類を超える生の植物展示を成功させ、来園者からも称賛され、植物園の価値を高める活動に多大に貢献してきた。他にも市内の小学校への出前講座などを実施し、環境学習などを通じて、自然の大切さ、植物の価値や楽しさなど、植物園の役割存在意義を伝えてきた。研究においても、姫路市市花であるサギソウについての研究に取り組み、成果を報告した。このような活動は植物園功労賞に該当するものであり、特に優れた業績と認められる。

植物園功労賞

城山 美穂（水戸市植物公園）

水戸市役所に入庁後、現在に至るまで水戸市植物公園に勤務し、園内で活動する同好会やボランティア団体の育成指導にあたるほか、令和3年にリニューアルした温室再整備等の大規模プロジェクト事業を推進し多大なる実績を残してきた。また、開園30周年を記念し、平成29年度に実施された展示・教室やボランティアの活動と、水戸市植物公園で収集している植物を「花のカルチャーの今」として紹介した冊子「水戸の植物文化 平成の花のカルチャー」の原稿作成から編集を担当し、後世に残る貴重な資料を作成したのは顕著な実績である。

中野 美央（昭和薬科大学薬用植物園）

昭和薬科大学薬用植物園に19年間にわたり勤務し、その間、植栽植物の栽培管理に加え、新たな植物の導入、導入記録の管理、毎年の植栽計画、さらには一般市民向けの薬草教室の準備等を中心となって進めてきた。また、昭和薬科大学薬用植物園が行ってきたさまざまな研究にも積極的に参加し、大きな役割を果たすとともに、植物園協会誌へも報告してきた。近年では、薬用植物の栽培研究に積極的に取り組んでおり、今後のさらなる活躍が期待される。

坂崎奨励賞

松江 大輔（箱根町立箱根湿生花園）

学芸員として、15年にわたり園内管理、展示植物の育成管理、教育普及活動を担当し、植物園としての質の向上に貢献してきた。特に、担当する年4回の企画展では、展示物の育成からイベント運営までを担い、園に欠かすことのできない企画となっている。箱根湿生花園は、1976年に箱根町により設置され、指定管理期間（2007～2021年）を経て、2022年より正式に箱根町の直営に戻った。途中、2011年の東日本大震災、2015年には箱根山火山活動の活発化、2019年からはコロナ禍と、植物園を取り巻く状況は決して穏やかなものでは無く、何度も経営の危機に見舞われたが、松江氏は、植物園としての質を向上させるため、尽力してきた。今後のさらなる活躍が期待される。

保全・栽培技術賞

村井 良徳（国立科学博物館筑波実験植物園）

坪井 勇人（白馬五竜高山植物園）

尾関 雅章（長野県環境保全研究所）

高山植物の栽培技術開発に積極的に取り組み、絶滅危惧種であるキタダケヨモギ、チシマツメクサ、ハイツメクサなどの増殖法について、植物園協会誌に報告してきた。

- ・高山植物の栽培技術の開発：挿し芽による絶滅危惧種ハイツメクサ（ナデシコ科）の増殖例（日本植物園協会誌 58：100-102に発表）
- ・白馬岳の絶滅危惧種の域外保全 一種子による栽培から開花・結実まで（日本植物園協会誌 57：60-65に発表）
- ・高山植物栽培の技術開発：挿し芽による絶滅危惧種キタダケヨモギとチシマツメクサの増殖例（日本植物園協会誌 57：101-102に発表）

特別賞

NHK「らんまん」制作チーム

NHK朝の連続テレビ小説「らんまん」は、牧野富太郎の生涯を題材にして制作されたものであるが、その放送を通じて、植物学者や植物、植物園に関するさまざまな情報や感動を視聴者の心の中にもたらした。また、全国各地で開催された関連イベントの開催なども相まって、人々が植物や植物園への関心を大きく膨らませ、植物園の存在や役割に注目することとなった。この大きなうねりは植物園及び植物園協会の事業の推進に大きく貢献した。